



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書
Relation	(2013). 北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書. 北海道大学
Issue Date	2013-03-21
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82908
Rights	本報告書の著作権は北海道大学にあります
Type	report
File Information	hokkaidoU_report_201303_Part1.pdf, Part1



北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する
調 査 報 告 書

2013年 3 月

＜正誤表＞

106頁 3. アイヌ人骨の返還

〔北海道ウタリ協会旭川支部への返還〕部分の2～3行目

誤： 旭川支部は、返還された5体を火葬にして、納骨堂「殉郷殿」（旭川市旭岡6丁目、旭岡墓地内）に納骨した。

正： 旭川支部は、返還された5体を納骨堂「殉郷殿」（旭川市旭岡6丁目、旭岡墓地内）に納骨した。

目 次

I. 本報告書作成の目的	1
II. 本報告書作成にあたり調査した資料	2
II-1. 調査資料目録	2
II-2. 発掘人骨台帳	5
III. 調査報告	11
III-1. 北海道帝国大学医学部・北海道大学医学部におけるアイヌ研究とアイヌ人骨収蔵	11
1. 北海道帝国大学医学部におけるアイヌ研究の始動	11
1-1. 草創期医学部各講座のアイヌ研究概観	11
1-2. 解剖学第二講座（平光吾一教授）のアイヌ人体質研究	14
1-3. 解剖学第一講座（山崎春雄教授）のアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵	15
2. 日本学術振興会における総合研究「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」の策定	18
2-1. 日本学術振興会補助金（1933年度後期）への北海道帝国大学医学部のアイヌ研究申請	18
2-2. 日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」の策定	18
2-3. 日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」の調査研究分野と分担	20
3. 日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」解剖学部のアイヌ研究	22
3-1. 解剖学部（山崎春雄）の「研究成果」	22
(1) アイヌ生体計測研究	22
(2) 『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要』にみる山崎春雄の「研究成果」	23
3-2. 解剖学部（児玉作左衛門）の「研究成果」	28
(1) 北海道・樺太・千島における旧アイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵とアイヌ人骨計測研究	28
①八雲町旧墓地発掘（1934年）	29
②長万部町旧墓地発掘（1934年）	37
③浦幌町愛牛旧墓地発掘（1934年）	37
④落部村旧墓地発掘（1935年）	38
⑤森町旧墓地発掘（1935年）	42
⑥樺太旧墓地発掘（1936年）	43
⑦千島占守島旧墓地発掘（1937年、1938年）	44
(2) アイヌ頭蓋大後頭孔損傷研究	46
(3) 児玉作左衛門のアイヌ人骨計測研究	47
(4) 児玉作左衛門のアイヌへの視線	48
(5) 『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要』にみる児玉作左衛門の「研究成	

果」	48
3-3. 日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」解剖学部の「研究成果」	50
4. 北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座が行った戦後のアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵とアイヌ研究	51
4-1. 戦後のアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵	51
(1) 解剖学第一講座のアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵	51
① 静内町川合発掘（1962年）	51
② 静内町豊畑共同墓地発掘（1971年、1972年）	53
(2) 解剖学第二講座のアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵	54
① 平取町長知内発掘（1952年）	55
② 根室市発掘（1954年）	55
③ 岩内町発掘（1956年、1957年）	55
④ 静内町静内駅前共同墓地発掘（1956年）	56
⑤ 千歳市墓地発掘（1958年）	58
⑥ 帯広市伏古共同墓地発掘（1963年）	58
⑦ 千歳市発掘（1965年）	59
⑧ 江別市対雁共同墓地発掘（1965年）	59
(3) その他	61
① 様似町様似海岸発掘（1959年）	61
② 平取町二風谷発掘（1959年）	61
4-2. 戦後の見玉作左衛門のアイヌ研究	62
(1) アイヌの「人種的帰属」に関する研究	62
(2) アイヌ頭蓋大後頭孔損傷の研究	63
III-2. アイヌ納骨堂建設以前のアイヌ人骨の保管と「天覧」	66
1. 発掘・収蔵アイヌ人骨の保管	66
1-1. 北海道帝国大学医学部解剖学法医学講堂におけるアイヌ人骨の保管（1920～1938年）	66
1-2. 北海道帝国大学医学部標本庫の設置（1938年）	68
1-3. 北海道大学医学部の新築移転に伴うアイヌ人骨の保管（1968年）	72
2. 北海道帝国大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座収蔵アイヌ人骨の「天覧」	77
2-1. 澄宮の「台覧」（1932年8月14日）	77
2-2. 昭和天皇への「御進講」（1936年9月28日）	78
2-3. 昭和天皇の「天覧」（1936年10月8日）	80
2-4. 戦後の「天覧」	81
III-3. アイヌ納骨堂建設と供養祭の実施	82
1. 海馬沢博の北海道大学批判と北海道大学医学部の対応	82
1-1. 1980年11月27日付海馬沢博書簡	82
1-2. 1980年12月12日付海馬沢博書簡	84
1-3. 1981年12月21日付海馬沢博書簡	88
1-4. 1982年2月8日付海馬沢博書簡	89

1-5. 海馬沢博の来学（1982年4月8日）	91
2. 北海道ウタリ協会の申し入れと北海道大学医学部の対応	92
2-1. 北海道ウタリ協会の申し入れ（1982年6月9日）	92
2-2. 北海道ウタリ協会の医学部視察（1983年1月24日）	94
2-3. アイヌ納骨堂建設にかかわる協議	95
2-4. 供養祭基金設置にかかわる協議	99
2-5. アイヌ納骨堂の建設と供養祭の実施（1984年8月11日）	100
2-6. 供養祭基金の設置（1988年8月4日）	101
3. アイヌ人骨の返還	106
Ⅲ-4. 医学部改修と収蔵アイヌ資料の管理	108
1. 医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座の研究体制の転換	108
1-1. 医学部解剖学第一講座の研究体制の転換	108
1-2. 医学部解剖学第二講座の研究体制の転換	108
2. アイヌ納骨堂における頭蓋骨箱の管理	108
3. 医学部改修に伴う収蔵アイヌ資料の管理	109
4. 北海道ウタリ協会・北海道アイヌ協会への人骨台帳の提供	110
Ⅳ. 総括	113
Ⅳ-1. アイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵経緯	113
Ⅳ-2. 収蔵アイヌ人骨の保管	115
Ⅳ-3. アイヌ納骨堂建設と供養祭基金設置の経緯	115
Ⅳ-4. アイヌ人骨管理の実状	117
Ⅳ-5. 「北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書」とアイヌ人骨管理体制の確立	117
卷末資料：	
〔卷末資料1〕北海道帝国大学・北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座のアイヌ研究論文一覧	137
〔卷末資料2〕北海道帝国大学・北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座のアイヌ研究に関する学位論文一覧	146
〔卷末資料3〕北海道帝国大学・北海道大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座収蔵アイヌ人骨一覧（2012年12月4日現在）	148
〔卷末資料4〕北海道大学医学部収蔵アイヌ人骨発掘地域別体数（2012年12月4日現在）	183

I. 本報告書作成の目的

北海道大学医学部は、アイヌ納骨堂に医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座が発掘・収集した1,000体近いアイヌ人骨を保管している。

北海道大学総長は、2010年5月19日、「国立大学法人北海道大学におけるアイヌ関係資料に関する調査の実施について」を裁定し、担当理事を指名して2012年度末までに調査報告書を総長宛に提出するよう指示した。

上記総長の指示を受けて、担当理事は、2010年5月26日、調査の目的と調査資料を以下のように定めた。

(1) 調査の目的

①北海道大学医学部旧解剖学教室が、アイヌ人骨を収蔵するにいたった経緯とその問題点を明らかにする。

②北海道大学医学部旧解剖学教室が、アイヌ人骨を収蔵した後における取り扱いとその問題点を明らかにする。

(2) 調査収集資料

①日本学術振興会公文書

②日本学術振興会刊行物

③北海道大学公文書

④北海道大学医学部公文書

⑤日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会委員の著作、ならびに人類学・医学・考古学関係雑誌掲載論文

⑥北海道ウタリ協会・北海道アイヌ協会刊行物

⑦『北海タイムス』、『北海道新聞』等の関係記事

北海道帝国大学医学部発足当初から、アイヌを対象とした研究は解剖学第一講座・解剖学第二講座の重要な関心事であったが、大々的に取り組む契機となったのは、日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会による「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」の調査研究分野「解剖学部」（1933～1937年）に山崎春雄（解剖学第一講座教授）と児玉作左衛門（解剖学第二講座教授）が参画して以降であった。したがって、資料調査・収集は、日本学術振興会公文書・刊行物、北海道大学・医学部公文書、山崎春雄・児玉作左衛門のアイヌ研究関係著作に重きをおくこととした。

本報告書の目的は、日本学術振興会公文書・刊行物、日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会（解剖学部）に参画した山崎春雄・児玉作左衛門の研究論文、北海道大学と医学部所蔵公文書等を踏まえて、アイヌ墓地発掘とアイヌ人骨収蔵の経緯、収蔵アイヌ人骨の保管状況の推移と問題点等を明らかにすることである。

Ⅱ．本報告書作成にあたり調査した資料

Ⅱ－１．調査資料目録

通し番号を付した調査資料の目録を表１～表５に掲げた。

なお、人類学・医学・考古学関係雑誌、新聞記事、文献等は、引用の都度示すこととし、目録からは省いた。

１．日本学術振興会公文書・刊行物

日本学術振興会・北海道大学所蔵公文書中には、日本学術振興会学術部第八常置委員会第８小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」（1933～1937年）の策定・実施に関する文書は見出せなかった。調査した日本学術振興会刊行物は、表１のとおりである。

表１ 日本学術振興会刊行物一覧

No	資料名	刊行年	所蔵先
1	『日本学術振興会要覧 昭和九年五月』（日本学術振興会編・発行）	1934年	北海道大学附属図書館ほか
2	『日本学術振興会要覧 昭和十六年五月』（日本学術振興会編・発行）	1941年	東京工業大学附属図書館ほか
3	『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 第1回』（日本学術振興会編・発行）	1936年	北海道大学附属図書館ほか
4	『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 第2回』（日本学術振興会編・発行）	1938年	北海道大学附属図書館ほか
5	『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 第3回』（日本学術振興会編・発行）	1939年	東京学芸大学附属図書館ほか
6	『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 13年度 第4回』（日本学術振興会編・発行）	1940年	北海道大学附属図書館ほか
7	『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 14年度 第5回』（日本学術振興会編・発行）	1941年	近畿大学中央図書館ほか
8	『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 15年度 第6回』（日本学術振興会編・発行）	1941年	近畿大学中央図書館ほか
9	『特別及び小委員会ニヨル総合研究ノ概要 16年度 第7回』（日本学術振興会編・発行）	1943年	北海道大学水産学部図書室ほか
10	『学術振興』（日本学術振興会編・岩波書店発行）創刊号～第20号	1936年11月～1940年5月	北海道大学附属図書館ほか

２．北海道大学・北海道大学医学部所蔵公文書

北海道大学・北海道大学医学部所蔵公文書中の、医学部旧解剖学教室によるアイヌ人骨の収蔵経緯、保管施設、管理状況に関する文書は表２のとおりである。

表2 北海道大学・北海道大学医学部所蔵公文書一覧

No	資料名	作成年	形態	所蔵先
11	医学部解剖学第二講座「アイヌ民族人体骨発掘台帳」	1980～1984年頃	帳簿（写）	事務局
12	「アイヌ人骨台帳」	2008年	ハードコピー (Microsoft Excel 様式のプリント)	医学部
13	「第一解剖移管」	2008年	ハードコピー (Microsoft Excel 様式のプリント)	医学部
14	「発掘人骨台帳（抜粋）」	2003～2008年	電子ファイル (Microsoft Excel 様式)	医学部
15	「情報公開開示請求関係 平成19年度～」	2007年度	文書綴	事務局
16	「情報公開開示請求関係 平成20年度～」	2008年度	文書綴	事務局
17	「北海道帝国大学医学部創立費新営費工事落成調書 附図」	1924年度頃	図面	事務局
18	「国有財産調書（二）雑件 昭和十三年度」	1938年度	文書綴	事務局
19	「医学部教授会議事録」	1982～1991年度	文書綴	医学部
20	「医学部教授会メモ」	1982～1987年度	文書綴	医学部
21	「アイヌ人骨問題経緯（昭和59.4以降～ウタリ 協会関係）」	1984～1991年	文書綴	医学部
22	「アイヌ人骨供養祭基金募金関係書類」・「企業関係 募金一覧」・「供養祭基金確認書（63.8.4）」	1985～1988年	文書綴	医学部
23	「イチャルパ関係書類」	1985年～	文書綴	医学部
24	「イチャルパ費用領収書及び振込手数料」	1987年8月	文書綴	医学部
25	「アイヌ人骨供養基金準備支出状況」	1987年11月	文書綴	医学部
26	「第二回アイヌ人骨イチャルパ」	1985年8月	ネガフィルム・印 画紙写真	医学部
27	「第4回アイヌ人骨イチャルパ（於納骨堂）」	1987年8月	ネガフィルム・印 画紙写真	医学部
28	「平成元年度イチャルパ」	1989年8月	ネガフィルム・印 画紙写真	医学部
29	「平成2年度イチャルパ（2）」	1990年8月	ネガフィルム・印 画紙写真	医学部
30	「第1回 アイヌ人骨イチャルパ No2の①」	1984年8月	カセットテープ	医学部
31	「第1回 アイヌ人骨イチャルパ No2の②」	1984年8月	カセットテープ	医学部
32	「第2回 アイヌ人骨イチャルパ No2の①」	1985年8月	カセットテープ	医学部
33	「第2回 アイヌ人骨イチャルパ No2の②」	1985年8月	カセットテープ	医学部
34	「第4回 アイヌ人骨イチャルパ（No1）」	1987年8月	カセットテープ	医学部
35	「第4回 アイヌ人骨イチャルパ（No2）」	1987年8月	カセットテープ	医学部
36	「第5回 アイヌイチャルパ」	1988年8月	カセットテープ	医学部

3. 北海道大学大学文書館所蔵資料

北海道大学大学文書館所蔵資料については、表3のとおり、解剖学第一講座・解剖学第二講座及び講座関係者の旧蔵写真・日誌・計測表等の資料と、アイヌ人骨保管場所に関する図面や新聞切抜帳等の大学沿革資料を調査した。

表3 北海道大学大学文書館所蔵資料一覧

No	資料名	作成年	形態
37	医学部解剖学第一講座旧蔵フィルム	1934～1944年頃	ネガフィルム
38	医学部解剖学第一講座旧蔵台紙写真	1936年頃	印画紙写真 (台紙貼付)
39	北方文化研究施設旧蔵アルバム	1934～1976年頃	印画紙写真 (市販アルバム貼付)
40	「日高アイヌ（大場利夫）計測表」	1955年以前	計測罫紙
41	「北海道大学所属国有財産沿革」	1956～1970年頃	製本（図面等）
42	解剖学教室日誌： 解剖学第一・第二講座「解剖学第一講座（記録）」	1952～1965年	帳簿
43	解剖学教室日誌： 解剖学第一講座「日誌」	1966～1973年	帳簿
44	解剖学教室日誌： 解剖学第一講座「日誌」	1973～1981年	バインダーノート
45	新聞切抜帳	1925～1972年	スクラップブック

（注）資料37～資料39は個人情報保護のため一部または全部の利用を制限される。

4. 個人所蔵資料

調査した個人所蔵資料は、表4のとおりである。

資料48～資料49は、1980～1985年のアイヌ人骨問題対応資料の複写を紙ファイルに綴じたものである。作成者は当時の医学部関係者と推察される。

資料50は、1983～1984年のアイヌ納骨堂建設関係資料の複写を紙ファイルに綴じたものである。作成者は当時の医学部関係者と推察される。

資料51は、1998年に生体機能構造学講座・生体構造解析学分野（旧解剖学第二講座）の教授に就いた渡辺雅彦が、旧解剖学第二講座の残置物から抜き出して保管していた資料である。

表4 個人所蔵資料一覧

No	資料名	作成年	形態
46	解剖学教室日誌： 「教室備忘録 昭和二十年一月 第二解剖学教室」	1945～1951年	製本罫紙
47	「児玉教授門下生 学位名簿」	1949～1952年	製本罫紙
48	「アイヌ人骨についての対応（1）」	1981～1984年	文書綴
49	「アイヌ人骨についての対応（2）」	1980～1985年	文書綴
50	「納骨堂（アイヌ人体骨）計画について S58～S59」	1983～1984年	文書綴
51	「旧解剖学第二講座関係資料」	1998～2001年頃	文書綴

5. 北海道ウタリ協会・北海道アイヌ協会関係資料

表5のとおり、北海道ウタリ協会・北海道アイヌ協会（2009年～）関係資料を調査した。

表5 北海道ウタリ協会・北海道アイヌ協会関係資料一覧

No	資料名	作成年	形態
52	『アイヌ史 北海道アイヌ協会活動史編』（北海道ウタリ協会編・発行）	1994年	図書
53	『先駆者の集い』第52-71号復刻版（北海道ウタリ協会編・発行） 『先駆者の集い』第72-90号復刻版（北海道ウタリ協会編・発行）	2003年	機関紙
54	『50年のあゆみ』（北海道ウタリ協会編・発行）	1996年	図書
55	「北海道大学アイヌ納骨堂におけるイチャルパ」（北海道ウタリ協会・北海道アイヌ協会作成）	1984年～	供養祭配付印刷物
56	『四十年のあゆみ』（北海道ウタリ協会浦河支部編・発行）	1986年	図書

II - 2. 発掘人骨台帳

1. 野帳（フィールド・ノート）、発掘人骨台帳原本

北海道大学医学部収蔵アイヌ人骨に関する最も重要な一次資料である野帳（フィールド・ノート）と発掘人骨台帳原本（以下、発掘人骨台帳と記す）について、判明したことを記しておく。

解剖学第一講座・解剖学第二講座は、発掘現場において野帳（フィールド・ノート）を作成し、それらにもとづいて発掘人骨台帳を作成していたことを疑う余地はない。

野帳（フィールド・ノート）は、野村愛介（解剖学第二講座講師）が論文に「児玉教授の落部アイヌ墳墓遺跡発掘に就ての記録を次に簡単に記す」、「児玉教授の〔旧長万部アイヌ墓地〕発掘に関する記録を略記す」、「児玉教授の〔旧愛牛アイヌ墓地〕発掘に関する記録を引用す」¹⁾と記述したことからも、その存在を窺える。

しかしながら、野帳（フィールド・ノート）の所在は不詳である。

発掘人骨台帳は、後述する（1）医学部解剖学第二講座「アイヌ民族人体骨発掘台帳」（複写物）《資料11》、（2）発掘人骨台帳の単頁複写物（75頁、111～113頁、144～146頁）《資料48、資料51》、（3）電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳（抜粋）」《資料14》が現存していることから、解剖学第二講座で作成していたことは明らかである。

解剖学第二講座の発掘人骨台帳は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」と単頁複写物の各頁上方に写ったタックシール（見出紙、合計18枚）と、電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳（抜粋）」内のファイル名から判断すれば、下記の順序構成である²⁾。

「目次」→「渡島国アイヌ」→「胆振国アイヌ」→「後志国アイヌ」→「石狩国アイヌ」→「天塩国アイヌ」→「日高国アイヌ」→「十勝国アイヌ」→「釧路国アイヌ」→「根室国アイヌ」→「北見国アイヌ」→「千島」→「樺太アイヌ」→「礼文島」→「第一解剖移管」→「石時代人」→「台湾・ギリヤーク・満洲・支那」→「朝鮮・欧洲・オロッコ・ペルー」

しかしながら、解剖学第二講座の発掘人骨台帳の所在は不詳である。

解剖学第一講座の発掘に関する記録は、解剖学第二講座の発掘人骨台帳の単頁複写物（111～113

頁)に窺える程度である。単頁複写物111頁の右上欄外に「以下ノ頭蓋骨ヲ第一解剖ヨリ移管(昭25.2.24.)」と記載があることから、単頁複写物111～113頁は、解剖学第二講座が解剖学第一講座より移管を受けた人骨のリストであると判明する。ハードコピー「第一解剖移管」《資料13》は、電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳(抜粋)」内の該当ファイル「第一解剖移管」をプリントしたものであり、内容は単頁複写物111～113頁を転写入力したものである。

しかしながら、単頁複写物111～113頁の転記のもととなった解剖学第一講座の発掘人骨台帳の所在は不詳である。

2. 発掘人骨台帳(複写物、電子ファイルホルダー)

現在、所在を確認できる発掘人骨台帳は、以下の複写物、電子ファイルホルダー(Microsoft Excel様式)、そのハードコピーである。

(1) 《資料11》「アイヌ民族人体骨発掘台帳」(複写物、事務局所蔵)

医学部解剖学第二講座「アイヌ民族人体骨発掘台帳」は、発掘人骨台帳のアイヌ人骨関係部分(56頁分)を複写したものである。

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳 医学部解剖学第二講座」と表紙を添付したA3版見開き32枚の複写物である。21～32頁(23頁は2種類)、37～44頁、47～60頁、69～80頁、83～86頁、89～90頁、93～100頁からなっている。75頁(挟み込み頁)のナンバリングは手書きである³⁾。複写物に写っている台帳原寸は、片頁が195mm×263mmである。発掘人骨台帳は、B5版よりやや横幅の広い帳簿の類と考えられる。

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」は、北海道大学と医学部がアイヌ団体と対応していた1980～1984年頃に、収蔵アイヌ人骨体数・発掘地等を把握する必要上、発掘人骨台帳からアイヌ人骨関係を抜粋複写して医学部が作成した。2008年に事務局にあることがわかった「アイヌ民族人体骨発掘台帳」は、1980～1984年当時に事務局が医学部から入手していた複写物にほかならない。

以下は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」にかかわる医学部の対応である。2008年7月31日、北海道大学は総長名で医学研究科長本間研一宛に「「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の保有等の確認について(依頼)」(海大第841号)を送付して、2008年3月4日に開示した「アイヌ人骨台帳」(Excel版プリント)《資料12》の記載内容と、事務局に保管してあった医学部解剖学第二講座「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の記載内容との相異を確認するよう求めた。これに対して、「アイヌ人骨台帳」・「アイヌ民族人体骨発掘台帳」を添付して依頼したにもかかわらず、8月5日に医学研究科長は「「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の保有等の確認について(回答)」(海大医第381号)で、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」は「保有しておりません」と回答した⁴⁾。

(2) 《資料48、資料51》発掘人骨台帳の単頁複写物(個人所蔵)

解剖学第二講座の発掘人骨台帳から、アイヌ人骨関係部分(計7頁)を複写したものである。複写は75頁、111～113頁、144～146頁からなっている。75頁と111～113頁の複写作成時期は、綴じ込まれていたファイル作成時と同じ1981～1984年頃である。144～146頁の複写作成時期は不詳である。

(3) 《資料14》電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳(抜粋)」(医学部所蔵)

《資料14》は、2003年・2006年・2008年に、医学部事務部が時々必要に応じて作成した10種類の電子ファイルホルダー(Microsoft Excel様式)と3種類の電子ファイル(Microsoft Excel様式)であ

る。これら13種類のファイル群は、①解剖学第二講座の発掘人骨台帳を転写入力したExcelファイルを改訂（加筆、修正、行・列の削除、レイアウト変更）したもの、②アイヌ納骨堂内の頭蓋骨箱・四肢骨箱の箱名毎に①のExcelファイルを整理したものに大別される。ファイル群の内容に鑑み、本報告書ではこれら13種類のファイル群を「発掘人骨台帳（抜粋）」と総称する。

最も古い作成ログ記録があるのは、電子ファイルホルダー「骨分類」（2003. 5. 27ログ）であり、最も新しい作成ログ記録があるのは、電子ファイルホルダー「20. 1. 24情報公開」（2008. 1. 24ログ）である。これらの作成経過は、以下のものであったと考えられる。

〔経過1〕解剖学第二講座は、発掘人骨台帳を作成して保管していた。

〔経過2〕医学部と解剖学第二講座は、1980～1983年頃、発掘人骨台帳から、複写物（発掘人骨台帳複写）を作成した。

〔経過3〕医学部と解剖学第二講座は、1980～1983年頃、発掘人骨台帳複写から、アイヌ人骨関係頁を抜粋複写して、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」を作成した。

〔経過4〕1998年10月に生体機能構造学講座・生体構造解析学分野（旧解剖学第二講座）の教授に就いた渡辺雅彦は、翌1999年頃に、「旧解剖学第二講座関係資料」中にあった発掘人骨台帳複写を転写入力し、電子ファイルホルダー（Excel様式）（「渡辺転写ファイル」）を作成した。

〔経過5〕2003年、医学部事務部はアイヌ納骨堂内の確認調査の必要上から、渡辺雅彦に発掘人骨台帳の電子データの提供を求めた。渡辺雅彦は、作成してあった「渡辺転写ファイル」を医学部事務部に渡した。医学部事務部は受け取った「渡辺転写ファイル」に、返還に関する事項等を加筆して、電子ファイルホルダー「骨分類」（2003. 5. 27ログ）を作成した。

渡辺雅彦は、「渡辺転写ファイル」を作成した際、参照したのは帳簿状の発掘人骨台帳そのものではなく、複写であったと述べている。渡辺雅彦が参照した発掘人骨台帳複写は、電子ファイルホルダー「骨分類」（2003. 5. 27ログ）の内容から判断して、「目次」（1～19頁）、「千島」の一部（93～94頁：占守～別飛）、「台湾・ギリヤーク・満洲・支那」（144頁）、「朝鮮・欧洲・オロッコ・ペルー」（145～146頁）の頁が含まれていない複写物である。

また、渡辺雅彦は、人骨記録は重要な資料と考えて、すべてを自ら転写入力したと述べている⁵⁾。形態発生学・神経解剖学の専門家である渡辺雅彦にとって、アイヌ人骨だけを抜き出して電子ファイルホルダーを作成しなければならない理由は存在しない。事実、電子ファイルホルダー「骨分類」（2003. 5. 27ログ）は、発掘人骨台帳でアイヌ人骨以外の人骨の記述がある頁（「函館」、「礼文島」、「第一解剖移管」、「石時代人」）も、そのまま転写入力している。このことから、渡辺雅彦は、現存する「アイヌ民族人体骨発掘台帳」とは別の発掘人骨台帳の複写を参照し、そのすべてを転写入力したと判断できる。

渡辺雅彦が参照した発掘人骨台帳複写は、医学部改組・改修にともなう研究室移動の過程で散逸し、使用したPCはその後損壊した。その結果、発掘人骨台帳複写・「渡辺転写ファイル」ともども、現在の講座（解剖学講座・解剖発生学分野）にはない。

〔経過6〕2003年6月、医学部事務部は、アイヌ納骨堂内の頭蓋骨箱の木箱への入れ替え作業のため、堂内の確認調査（頭蓋骨箱の配置確認）を行い、電子ファイルホルダー「骨分類」（2003. 5. 27ログ）を改訂して、電子ファイルホルダー「骨分類調査後（15. 6. 10）」（2003. 6. 10ログ）を作成した。医学部事務部が行った改訂は、電子ファイルホルダー「骨分類」（2003. 5. 27ログ）で未入力であった「千島」の一部（93～94頁：占守～別飛）を、発掘人骨台帳（発掘人骨台帳複写か、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」）を参照して入力し、頭蓋骨箱の配置確認・返還事項を反映させたことである。市町村毎の集計表「アイヌ納骨堂遺骨保管数 平成15年6月10日現在」（頭蓋骨929体）と、アイヌ納

骨堂内の四肢骨箱名リスト（四肢骨箱202箱の配置図）であるExcelファイル「骨（頭骨以外）」も作成した。

〔経過7〕2006年、医学部事務部は、アイヌ納骨堂内の確認調査（頭蓋骨箱、四肢骨箱の配置確認）を行い、電子ファイルホルダー「骨分類調査後（15.6.10）」（2003.6.10ログ）を改訂した。そして、頭蓋骨箱・四肢骨箱の箱名リストを、改訂版ファイルの内容を反映させて作成した。

〔経過8〕2008年1月、医学部事務部は、Excelファイルホルダー「骨分類」（2003.5.27ログ）と発掘人骨台帳（発掘人骨台帳、あるいは発掘人骨台帳複写）とを照らし合わせて、Excelファイルホルダー「20.1.24情報公開」（2008.1.24ログ）を作成した。医学部事務部は、発掘人骨台帳の記載を1行ずつ（1体ずつ）、一字一句を照らし合わせて訂正・加筆し、綿密に行った。

このように述べた根拠は、下記のとおりである。

Excelファイルホルダー「20.1.24情報公開」（2008.1.24ログ）では、「浦幌47」の旧番号欄に「No35左／腕に出たるもの」と入力してある。しかし、2003年・2006年の電子ファイルすべて（現存する最も古いデータであるExcelファイルホルダー「骨分類」（2003.5.27ログ）から2006年改訂版ファイルまで）は、この個所は空欄である。空欄となっているのは、「渡辺転写ファイル」を作成した渡辺雅彦が、参照した発掘人骨台帳複写の当該個所を判読することが不可能であったからである。

また、現存する「アイヌ民族人体骨発掘台帳」77頁の「浦幌47」の旧番号欄は、複写がかすれていて記載事項の判読が困難である。特に「左」と判読することは不可能である。

「No35左／腕に出たるもの」と判読が可能なのは、発掘人骨台帳、あるいは「アイヌ民族人体骨発掘台帳」とは別の発掘人骨台帳複写（高解像度の複写物）が、医学部事務部に存在していたからにはほかならない。

同様に、電子ファイルホルダー「20.1.24情報公開」（2008.1.24ログ）の「樺太（江別）6」・「樺太（江別）20」の年代欄には、それぞれ「若年・1歳」・「若年・3歳」と入力してある。一方で、「アイヌ人体骨発掘台帳」100頁の各年代欄では、それぞれ「ク」・「若年」と記載してあり、年齢の記載はない。「ク」は、「樺太（江別）1」の「成年」と同一という意味である。発掘人骨台帳は100～101頁が「樺太（江別）」で構成され、100頁ではそれぞれ「ク」・「若年」、101頁ではそれぞれ「若年・1歳」・「若年・3歳」と記載してあったはずである。「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には101頁の複写はない。医学部事務部が電子ファイルホルダー「20.1.24情報公開」（2008.1.24ログ）の作成に際して参照したのは、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」以外の台帳であることは疑う余地がない。

換言すれば、医学部は、2008年1月24日には、発掘人骨台帳、あるいはその複写物を保有していた。

（4）《資料51》静内発掘No.1～No.166の整理リスト（個人所蔵）

《資料51》に、静内発掘No.1～No.166を整理したリスト（ハードコピー、A4版・4枚・2セット）があることを2013年2月確認した。リストは書式からExcelファイルのプリントと考えられる。リストの列（項目）は、「発掘No.」、「整理No.」、「性別」、「年齢」、「火山灰層より頭蓋までの距離」、「全長」、「棺の有無」、「副葬品」、「備考」である。

「発掘No.1～発掘No.166」は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の番号「静内1～静内166」（38～44頁）と一致する。「整理No.」と「火山灰層より頭蓋までの距離」以下の項目は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」にはない。1セットは「副葬品」、もう1セットは「〔静内〕アイヌ頭蓋台帳〔発掘〕」（見せ消し線と〔 〕内の文字は、朱筆手書き）との表紙が付されている。

このリストは、1956年静内郡静内町静内駅前共同墓地の発掘後、発掘・保管を担当した松野正彦（解剖学第二講座助教授：1949～1960年、解剖学第一講座教授：1960～1977年）のもとで、発掘人骨

の整理・研究を行う過程で作成された。松野正彦が発掘時に作成した野帳（フィールド・ノート）をもとにしている。

また、発掘人骨台帳の単頁複写物75頁には、「日高 静内 1-166（38頁及び別書記載）（第一解剖保管）」と記載がある。「別書」にあたるものが、静内発掘No 1～No166の整理リスト（オリジナル版）の可能性が高い。

その後、リストは電子ファイルに転写入力された。電子ファイルの作成時期・作成者は不詳である。

3. 発掘人骨台帳の復元

表6「発掘人骨台帳の復元頁一覧」は、（1）医学部解剖学第二講座「アイヌ民族人体骨発掘台帳」、（2）発掘人骨台帳の単頁複写物（75頁、111～113頁、144～146頁）、（3）電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳（抜粋）」を重ね合わせて、一覧表にした。

少なくとも、表6「発掘人骨台帳の復元頁一覧」によって、解剖学第二講座が作成した発掘人骨台帳の構成を復元したことにはなる。

表6 発掘人骨台帳の復元頁一覧

タックシールの順序	頁数	台帳の複写の有無		電子ファイルの有無	内容
		紙台帳	単頁複写物		
目次	1-19頁	×		×	*目次、空欄の可能性
渡島国アイヌ	20頁	×		○	函館
	21-22頁	○		○	森
	貼付の23頁	○		○	森
	23頁	○		○	森
	24頁	○		○	尾白内、砂原、上ノ国
	25頁	○		○	(空欄)
	26-31頁	○		○	落部
	32頁	○		○	江差、泊、島牧、瀬棚
	33-36頁	×		—	*空欄の可能性
	37頁	○		○	(空欄)
	38-44頁	○		○	静内
	45-46頁	×		—	*空欄の可能性
胆振国アイヌ	47-51頁	○		○	八雲
	52頁	○		○	八雲、奥津内
	53-54頁	○		○	長万部
	55頁	○		○	中ノ澤
	56頁	○		○	室蘭、幌別、虻田、トコタン、豊浦、厚真
	57頁	○		○	千歳、千歳墓地発掘
	58頁	○		○	苫小牧
	59頁	○		○	千歳
	60頁	○		—	(空欄)
	61-68頁	×		—	*空欄の可能性
後志国アイヌ	69頁	○		○	余市、余別、古平、茅沼
	70頁	○		○	岩内、寿都、磯谷
	71頁	○		—	(空欄)
石狩国アイヌ	72頁	○		○	江別、夕張、札幌、上手稲、当別、由仁
	73頁	○		○	近文、旭川
天塩国アイヌ	74頁	○		○	留萌、名寄、稚内、留萌、苫前
日高国アイヌ	挟み込みの75頁	○		○	日高（日高1～日高40）
	75頁	×	○	○	静内、杵臼、厚賀、野深、東幌別、平取、上貫気別、幌泉、長知内、門別
十勝国アイヌ	76-78頁	○		○	浦幌
	79頁	○		○	十勝太、広尾、久遠、大津、帯広
	80頁	○		—	(空欄)

タックシールの順序	頁数	台帳の複写の有無		電子ファイルの有無	内容
		紙台帳	単頁複写物		
十勝国アイヌ	81-82頁	×		—	* 空欄の可能性
	83頁	○		○	釧路
釧路国アイヌ 根室国アイヌ 北見国アイヌ	84頁	○		○	根室、興部、標津
	貼付の85頁	○		○	北見（北見1～北見33）
	85頁	×		○	網走、斜里
	貼付の86頁上段	○		○	北見（北見34～北見38）
	86頁上段	×		○	常呂
	86頁下段	○		○	紋別、浜頓別、泊内、遠軽、稚内、北見（北見39～北見40）
	87頁	×		○	常呂
	88頁	×		○	宗谷（大岬）
	89頁	○		○	宗谷（宗谷）
	90頁	○		○	（地域）不明
	91-92頁	×		—	* 空欄の可能性
千島	93頁	○		○	千島（占守）
	94頁	○		○	千島（別飛）
	95頁	○		○	千島（択捉、国後、幌筈）
樺太アイヌ	96頁	○		○	樺太（内淵）
樺太アイヌ	97頁	○		○	樺太（内淵、栄浜）
	98頁	○		○	樺太（魯礼）
	99頁	○		○	樺太（相浜、大谷、富内、志安、白浦、新聞、内路、久春内、豊原、幌奈、敷香、大泊、野寒、落帆、散江）
	100頁	○		○	樺太（不明、江別）
	101頁	×		○	樺太（江別）
礼文島	102～110頁内	×		○	礼文（浜中、上泊、香深、船泊）、利尻島（鬼脇） * 空欄を含む可能性あり
第一解剖移管	111頁	×	○	○	「以下ノ頭蓋骨ヲ第一解剖ヨリ移管（昭25. 2. 24.）」 千歳、野深、興部、杵臼、東幌別、江別、千島（幌筈）、樺太（不明）、礼文
	112頁	×	○	○	利尻、江別、平取、荷負、上貫気別、千島（エトロフ）、樺太（大泊、散江、野寒、落帆）、近文、斜里、釧路、台湾
	113頁	×	○	○	台湾、樺太、平取、杵臼
石時代人	114～143頁内	×		○	〔石時代人（網走～小幌）〕 北見（網走、最寄、猿洞、仁倉）、胆振（輪西、室蘭、鷲別、虻田、小幌）、渡島（函館、尾白内）、根室（根室）、後志（余市、尻岸内）、樺太（遠淵）、千島（占守） * 空欄を含む可能性あり
	114～143頁内	×		○	〔石時代人（樺太～乙部）〕 樺太（鈴谷）、渡島（尾白内、森、乙部） * 空欄を含む可能性あり
台湾、ギリヤーク、満洲、支那	144頁	×	○	×	台湾、ツングース、ギリヤーク、オロッコ、ペルー、 欧洲（スイス、ロシア）、オロッコ
朝鮮、欧洲、オロッコ、ペルー	145頁	×	○	×	満洲、支那、蒙古、朝鮮
	146頁	×	○	×	南洋（サイパン）

（注1）「紙台帳」は、医学部解剖学第二講座「アイヌ民族人体骨発掘台帳」を指す。

（注2）「単頁複写物」は、発掘人骨台帳の単頁複写物（75頁、111～113頁、144～146頁）を指す。

（注3）「電子ファイル」は、電子ファイルホルダー「骨分類」（2003. 5. 27ログ）と、電子ファイルホルダー「20. 1. 24情報公開」（2008. 1. 24ログ）とを重ね合わせた。

（注4）現代にそぐわない用語があるが、原資料のまま表記した。

（注5）八雲・奥津内・長万部・中ノ澤が「胆振国アイヌ」、静内が「渡島国アイヌ」等、発掘人骨台帳では地域を混同しているが、原資料の順序のまま「内容」欄に表記した。

（注6）タックシールの「釧路国アイヌ」、「根室国アイヌ」、「北見国アイヌ」は、この順序ですべて84頁に貼付されている。

（注7）タックシールの「台湾、ギリヤーク、満洲、支那」、「朝鮮、欧洲、オロッコ、ペルー」は、この順序で144頁に貼付されている。

（注8）貼付、挟み込みの区別は、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」に写っている陰影より判断した。

Ⅲ．調査報告

Ⅲ－１．北海道帝国大学医学部・北海道大学医学部におけるアイヌ研究とアイヌ人骨収蔵

１．北海道帝国大学医学部におけるアイヌ研究の始動

１－１．草創期医学部各講座のアイヌ研究概観

北海道帝国大学医学部は、1921年4月1日に内科学・外科学・解剖学・生理学・医化学・病理学の6講座で発足した。1922年には解剖学第二・同第三講座等の8講座、1923年には内科学第二・法医学等の6講座、1924年には精神病学等の3講座、1925年には外科学第三講座の増設をみた。

北海道帝国大学医学部にとって、アイヌ研究は発足当初から重要な研究テーマであった。『北大医学部五十年史』より、1921～1933年頃までのアイヌ研究に関する記述を以下に摘記する。

〈内科学第一・第二講座〉

教室の主要業績としては、結核に関するものがあげられなければならない。当時の北海道の地方的後進性は青年の結核の高発病率としてあらわれ、とくにアイヌの結核の惨状は目を掩わしめるものがあつた。これが教室をあげての結核に対する挑戦となったのである。……大正一五年には最初の日高アイヌの結核検診が行なわれている⁶⁾。

〈解剖学第一・第二講座〉

この当時の研究についてみるに、……〔山崎春雄等による〕アイヌの指紋や掌紋などに関する研究があげられる。……

〔平光吾一教授等による〕研究は、組織学とくに神経系の組織学とアイヌの人類学に向けられた。そのうちでアイヌの屍体数体についての軟部人類学の研究は、その当時まだほとんど未開拓の分野であつて、新しい画期的なものであつた。……

この頃〔1930年頃〕の研究は、山崎教授のもとではおもにアイヌの人類学的研究とくにその容貌の研究がすすめられていた。……

昭和八年頃からは解剖学教室の研究は次第にアイヌの人類学的研究に向けられはじめた。これは山崎教授がすでにアイヌの研究に着手されていたことと、児玉〔作左衛門〕教授が北大に赴任される際に、北大解剖教室ではアイヌの研究をも進めるべきであるとの長谷部言人先生（東北大学名誉教授）の意見を容れられたことによるもののようである。……両講座が協力してアイヌの形態学的ならびに人類学的研究をすすめることになったのである。……アイヌ骨格の蒐集はすでに昭和四～五年頃から日高方面ではじめられていた⁷⁾

〈法医学講座〉

研究は、血液型学、血清学に関するものが主体となった。日本人およびアイヌ人の各種血液型分布、血液型亜型に関するもの……等がある⁸⁾。

〈精神医学講座〉

内村〔祐之〕によって導入された脳組織病理学的研究が主流となっていたが、他方、アイヌ民族に特有なイムその他の精神疾患についての系統的な研究をはじめ、……臨床に即した実証的立場からの研究に重点がおかれていた⁹⁾。

『北大医学部五十年史』の記述は回想のみによっているので曖昧な点が散見されるが、各講座が創設期よりアイヌ研究に着手していたことは明瞭である。解剖学第一講座では初代教授の山崎春雄（1921～1948年在任）が、解剖学第二講座では初代教授の平光吾一（1922～1929年在任）がアイヌ研究を進めていた。

1933年11月以前、すなわち北海道帝国大学医学部が日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会の総合研究「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」に参画する以前、医学部関係者が発表したアイヌ研究に関する論文・講演要旨は表7のとおりである¹⁰⁾。

表7 北海道帝国大学医学部のアイヌ研究論文一覧（1926～1933年）

講座	
No	論文名等
内科学第一・第二講座	
〔1〕	有馬英二、近璋太郎、木村亮蔵「「アイヌ」ノ結核」（第5回日本結核病学会総会演説要旨）、『結核』第5巻第5号、1927年5月
解剖学第二講座	
〔1〕	平光吾一「所謂千島アイヌ族の現状と同種血球凝集反応に就て」、『人類学雑誌』第43巻第12号、1928年12月
〔2〕	平光吾一「千島及び弁天島出土土器破片に就て（一）」、『人類学雑誌』第44巻第4号、1929年4月
〔3〕	平光吾一「千島及び弁天島出土土器破片に就て（二）」、『人類学雑誌』第44巻第5号、1929年5月
〔4〕	平光吾一（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其1（頭頸）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
〔5〕	佐野好（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其2（上肢）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
〔6〕	椎名順二（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其3（下肢）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
〔7〕	新藤省三（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其4（背部）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
〔8〕	中野曄二（北海道帝大）「「アイヌ」人体質ノ研究 其5（内臓ニ就イテ）」（第37回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第2巻第2号、1929年6月
〔9〕	平光吾一「千島及び弁天島出土土器破片に就て（三）」、『人類学雑誌』第44巻第7号、1929年7月
〔10〕	平光吾一「アイヌ人同種血球凝集反応と海馬注口土器発見の価値」、『人類学雑誌』第44巻第12号、1929年12月
〔11〕	平光吾一「アイヌ人体質の研究（其一）」、『人類学雑誌』第45巻第1号、1930年1月*
〔12〕	平光吾一「アイヌ彫刻「イトッパ」の土器表面文様としての存在に就いて」、『人類学雑誌』第45巻第2号、1930年2月
〔13〕	新藤省三「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ三）「アイヌ」人ノ背筋、深部頸筋、脊髓及び脊柱ニ就テ」、『北海道医学雑誌』第8年第3号、1930年3月*
〔14〕	新藤省三「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ三）「アイヌ」人ノ背筋、深部頸筋、脊髓及び脊柱ニ就テ」、『北海道医学雑誌』第8年第4号、1930年4月*
〔15〕	平光吾一「アイヌ人体質の研究（其二）アイヌ人に於ける甲状腺挙筋に就て」、『人類学雑誌』第45巻第4号、1930年4月
〔16〕	新藤省三「深部頸筋ト側部軀幹筋トノ関係ニ就イテ」（解剖学教室同窓会第5回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第2号、1930年4月
〔17〕	椎名順二「上仔筋ト尾閥筋トノ結合セル二例」（解剖学教室同窓会第6回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第2号、1930年4月
〔18〕	平光吾一「色丹島茶談」、『九大医報』第4巻第2号、1930年4月
〔19〕	平光吾一「イトクバ問題に就き」、『人類学雑誌』第45巻第5号、1930年5月

[20]	平光吾一「余の用ひたるイトツパの用語に関する補遺」、『人類学雑誌』第45巻第6号、1930年6月
[21]	平光吾一「「アイヌ」人ノ体理学的観察（予報）」（第38回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第3巻第3号、1930年6月
[22]	椎名順二「「アイヌ」人ノ下肢筋ニ就テ」（第38回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第3巻第3号、1930年6月
[23]	平光吾一「アイヌ人に関する二三の知見」（日本学術協会第5回大会学術講演）、『日本学術協会報告』第5巻、1930年
[24]	佐野好「「アイヌ」人及ビ日本人ノ長拇外転筋（M. abductor pollicis longus）」（解剖学教室同窓会第8回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第3号、1930年6月
[25]	佐野好「「アイヌ」及ビ日本人深指屈筋副束ニ就テ」（解剖学教室同窓会第9回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第4号、1930年8月
[26]	平光吾一「アイヌ人頸部諸筋ニ関スル知見」（解剖学教室同窓会第9回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第4号、1930年8月
[27]	椎名順二「「アイヌ」人膝関節ニ就テノ二三ノ観察」（解剖学教室同窓会第9回例会講演要旨）、『九大医報』第4巻第4号、1930年8月
[28]	佐野好「アイヌ人体質の研究（其の五）アイヌ人肋骨異常分岐の一例」、『人類学雑誌』第45巻第9号、1930年9月
[29]	新藤省三「アイヌ人体質の研究（其の六）棘状突起の形態及び其の傾斜に就て」、『人類学雑誌』第45巻第10号、1930年10月
[30]	椎名順二「アイヌ人体質の研究（其の八）アイヌ人膝関節に就ての二三の観察」、『人類学雑誌』第45巻第11号、1930年11月
[31]	佐野好「アイヌ人体質の研究（其の九）アイヌ人及び日本人の深指屈筋副束に就て」、『人類学雑誌』第45巻第12号、1930年12月
[32]	佐野好「「アイヌ」人体質ノ研究（其七）「アイヌ」人上肢皮下静脈ニ就テ」、『解剖学雑誌』第3巻第9号、1930年12月
[33]	椎名順二「「アイヌ」人体質ノ研究（其十）「アイヌ」人下肢皮下静脈ニ就テ」、『解剖学雑誌』第3巻第9号、1930年12月
[34]	佐野好「「アイヌ」人体質ノ研究 其ノ十一「アイヌ」人ノ上肢筋ニ就テ」、『福岡医科大学雑誌』第24巻第1号、1931年1月*
[35]	椎名順二「「アイヌ」人体質ノ研究 其ノ十二「アイヌ」人ノ下肢筋ニ就テ」、『福岡医科大学雑誌』第24巻第4号、1931年4月
[36]	平光吾一、椎名順二「北海道神居村台場に見出されたる石塊面の不明彫刻に就いて」、『人類学雑誌』第47巻第1号、1932年1月
[37]	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究 「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査」、『北海道医学雑誌』第10年第3号、1932年3月*
[38]	平光吾一「アイヌ人体質の研究（其の十四）アイヌ人二腹顎筋の破格に就いて」、『人類学雑誌』第47巻第7号、1932年7月
[39]	久木田重雄「「アイヌ」人舌ノ輪郭乳頭ニ就テ」（第40回日本解剖学会集会演説抄録）、『解剖学雑誌』第5巻第7号、1932年10月
[40]	平光吾一、久木田重雄「「アイヌ」人下顎歯列後端Trigonum retromolareニ見タル一口腔腺ノ供覧」（第40回日本解剖学会集会における標本供覧）、『解剖学雑誌』第5巻第7号、1932年10月
[41]	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ四）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
[42]	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ五）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
[43]	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ六）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
[44]	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ七）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第10年第12号、1932年12月*
[45]	久木田重雄「「アイヌ」人体質ノ研究 其ノ十五「アイヌ」人舌ノ輪郭乳頭ニ就テ」、『福岡医科大学雑誌』第25巻第12号、1932年12月
[46]	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ八）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第11年第1号、1933年1月*

[47]	中野曄「「アイヌ」人体質ノ研究（其ノ九）「アイヌ」人内臓ノ肉眼的精査（第二篇）」、『北海道医学雑誌』第11年第1号、1933年1月*
精神医学講座	
[1]	秋元波留夫「アイヌの所謂『イム』に就いて」、『蝦夷往来』第7号、1932年3月
小児科学講座	
[1]	永井一夫、南浦邦夫「本邦児童及び「アイヌ」児童ノ児斑ニ就テ」（日本小児科学会第33回総会演説要旨）、『児科雑誌』第342号、1928年11月
[2]	永井一夫、南浦邦夫「本邦児童及び「アイヌ」児童の児斑に就て」、『児童研究』第36巻第1号、1932年4月
病理学講座	
[1]	藤井保・齋藤節・鹽谷壽「「アイヌ」人糞便ニ於ケル寄生虫卵検査ニ就テ」、『東京医事新誌』第2468号、1926年4月
[2]	中島謙太郎「「アイヌ」民族ノ婦人文身ニ就イテ」、『北海道医学雑誌』第4年第1号、1926年5月
[3]	中島謙太郎「「アイヌ」人ノ歯牙ニ就テ」（北海道医学会第4回大会報告抄録）、『北海道医学雑誌』第4年第3号、1926年9月
[4]	藤井保、鹽谷壽、齋藤節、安齋眞篤「「アイヌ」人ニ於ケル腸内寄生虫ノ分布」（第16回日本病理学会総会報告）、『日本病理学会会誌』第16年、1926年12月
[5]	藤井保・鹽谷壽・齋藤節・安齋眞篤「「アイヌ」人ニ於ケル寄生虫ノ分布」、『北海道医学雑誌』第4年第5号、1927年1月
[6]	中島謙太郎「同種血球凝集反応ヨリ観タル近文アイヌ及北海道在住日本人ノ生物化学係数ニ就テ」、『北海道医学雑誌』第4年第5号、1927年1月
[7]	中島謙太郎「十勝アイヌノ同種血球凝集反応ヨリ見タル人種係数ニ就テ」、『北海道医学雑誌』第4年第5号、1927年1月

（注1）1929年4月平光吾一・新藤省三・佐野好・椎名順二・中野曄は九州帝国大学医学部へ転出したが、転出後の論文は北海道帝国大学在職中の研究にもとづいているので、表7に記載した。特に一連の「アイヌ人体質の研究」に用いた資料は、平光吾一が北海道帝国大学医学部在職中に取得した屍体である。久木田重雄も同じ屍体を用いているため、表7に記載した。

（注2）*は、平光吾一・新藤省三・佐野好・椎名順二・中野曄の共同研究である。

北海道帝国大学医学部草創期のアイヌ研究は、平光吾一「アイヌ彫刻「イトッパ」の土器表面文様としての存在に就いて」のように医学・解剖学とは無縁なテーマもあるが、解剖学第二講座関係者の論文が抜きん出て多かった。

1-2. 解剖学第二講座（平光吾一教授）のアイヌ人体質研究

解剖学第二講座では、平光吾一教授のもとで、1924～1927年に道内各地の病院・刑務所等から得た病没したアイヌの5屍体（刑務所2人、病院1人、木工場1人、不詳1人）を解剖し、肉眼的観察によって皮膚・筋肉・内臓・関節等にアイヌの特徴を見出そうとした¹¹⁾。

平光吾一は、「世界の人種の中で、学者の注意を最引きつけて居るもの、一つは確にアイヌ人である。そのアイヌ人の本場である北海道に新設せられたる医学部」で、「固より研究室での仕事を中絶したくはないが、……アイヌ人屍体を解剖して見たいと云ふ念慮が自然と湧いて来た。……詳細に解剖して先人未踏のアイヌ人体質を研究せんと志した」と述べたうえで、次のように論文に記している。

アイヌ人の研究は体質的方面にも又精神的方面にも、今や手の入れ様の無いまでに多数の学者によりて調査せられた。最近又血清学的にも研究は進みつゝあるのである。然るにアイヌの全身を得て剖検観察した学者は今日まで一人もいない。……アイヌ人解剖の機会を得たのは、北大在職の吾人のみの特権であつたのである¹²⁾。

そして、北海道帝国大学医学部創設期におけるアイヌ研究就中解剖学第二講座のアイヌ研究は、その当時から新聞社の関心事であった。たとえば、1928年1月1日付『北海タイムス』は、解剖学第二

講座教授平光吾一がアイヌ屍体を解剖することになったことを「アイヌ民族の謎を解こうと／北大医学部で珍藏の四つの死体／日本の国宝」と報じた。そのうえで「これ〔アイヌの屍体〕は実に日本の国宝ですよ、北人の外に世界の何処にもないのですからね、北海道へ来た世界の医学者は皆見てゆきます、アイヌの血清や骨格については研究が出来てゐますが、筋肉その他の研究は未だ手がついてゐません、この四つの宝によつてその謎を解きたいと思つてゐます」¹³⁾と、平光吾一の談話を報じていた。

平光吾一は、アイヌの屍体という、人体軟部解剖学にとって「新しい領域」の研究資料を得て、歓喜して「日本の国宝」と呼んだのである。

しかしながら、平光吾一は次のようにも述べている。

欧州人及日本人に於ては腎は大多数に於て左高である。然るにアイヌに於ては五例中三回に於て右高にして左高なることが二回であつた。即右高の方が多い。最近の大庭氏の研究によると哺乳動物の腎は原則として右側頭位にある相だが比較して面白いと思ふ¹⁴⁾。

平光吾一にあっては、「日本の国宝」と崇めることは、アイヌ民族に尊厳をもって接することを意味してはいなかった。

平光吾一は、北海道帝国大学医学部教授に就いた社会的責任の自覚と、アイヌが暮らす北海道にふさわしい研究テーマを強烈に意識していた。アイヌを研究対象とすることそのものが、「新規性」に富んでいると考えていたのである。

1-3. 解剖学第一講座（山崎春雄教授）のアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵

発掘人骨台帳の単頁複写物111～113頁は、1950年2月24日、解剖学第一講座が、収蔵人骨を解剖学第二講座へ移管した当時の人骨リストである。発掘人骨台帳の単頁複写物111～113頁によって、以下の諸事実を確認できる。

- ①解剖学第一講座山崎春雄教授は、1931年に浦河郡でアイヌ墓地を発掘した。これは医学部におけるアイヌ墓地発掘の嚆矢である。1933年には沙流郡、1934年には旭川市においてアイヌ墓地を発掘した。
- ②1950年2月24日、解剖学第一講座は収蔵人骨59体（古人骨等を含む）を解剖学第二講座に移管した。このうち、アイヌ人骨は47体である。表8に発掘地別に59体を整理した。
- ③アイヌ人骨47体のうち、19体（杵臼5体、東幌別2体、野深2体、平取1体、荷負2体、上貫気別6体、近文1体）については、被葬者の氏名の記載がある。
- ④アイヌ人骨47体のうち、「発掘」と記載がある17体は、解剖学第一講座が発掘した。7体には「寄贈」あるいは「寄託」と記載があり、寄贈・寄託手続きを経て収蔵するにいたった。
- ⑤「発掘」と記載がある17体のうち、16体については表9のとおり発掘時期の記載もある。
- ⑥「発掘」と記載がある17体には、被葬者の氏名の記載がある。そのうちの14体（杵臼3体、野深1体、平取1体、荷負2体、上貫気別6体、近文1体）には年齢、2体（杵臼1体、野深1体）には没年月日、9体（平取1体、荷負2体、上貫気別6体）には埋葬年月日、1体（野深1体）には移住歴の記載がある。

表8 解剖学第二講座への移管人骨体数（1950年2月24日）

発掘地域	移管人骨体数	内訳（アイヌ人骨体数）
野深	6	6
東幌別	2	2
杵臼	11	11

発掘地域	移管人骨体数	内訳（アイヌ人骨体数）
荷負	2	2
平取	2	2
上貫気別	6	6
近文（旭川）	2	2
千歳	1	1
斜里	2	2
興部	1	1
釧路	1	1
江別	2	2
樺太	8	7
千島	2	2
礼文	2	
利尻	2	
台湾	2	
不詳	5	
合計	59	47

（注）発掘人骨台帳の単頁複写物111～113頁、巻末資料3より作成。

表9 発掘時期一覧（1931-1934年）

No.	発掘地域	体数	発掘年月日
1	浦河郡浦河町杵臼	2体	1931年9月4日
		1体	1931年9月5日
		1体	1931年9月6日
2	浦河郡浦河町東幌別	1体	1931年
3	浦河郡荻伏村人字野深村	1体	1931年
4	沙流郡平取村	1体	1933年10月20日
5	沙流郡平取村大字荷負村	2体	1933年10月26日
6	沙流郡平取村大字貫気別村字上貫気別	6体	1933年10月28日
7	旭川市近文	1体	1934年10月18日

（注）当時の自治体名を記入した。

山崎春雄は、1931・1933・1934年のアイヌ人骨発掘の意図、アイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵にいたる経緯を記していない。収蔵アイヌ人骨にもとづく研究論文を発表した形跡も見当たらない。発掘・収蔵経緯については、わずかに、医学部学友会誌『フラテ』第27号（1934年7月）に、O生が「昨年秋、平取村字荷負村のシケレベコタン（きはだの実部落）で骨格蒐集の為に、墓を数個掘った時の事である……」との記述を見出せるに過ぎない¹⁵⁾。O生はアイヌ人骨には言及しておらず、発掘人骨台帳（複写物、電子ファイルホルダー）にもシケレベコタンに関する人骨の記述はない。なお、O生は岡田正夫（解剖学第一講座助教授）である。

発掘地域の自治体の公文書、自治体史においても、発掘・収蔵経緯に関連する記述は現時点で確認されていない。そのため、発掘地の地番まで確定することは困難であるが、上記17体の発掘場所は表10の墓地と考えられる。

表10 発掘推測墓地一覧（1931-1934年）

No	発掘地	発掘推測墓地名	現住所
1	杵臼	杵臼共同墓地	浦河郡浦河町字杵臼542番
2	東幌別	東幌別共同墓地	浦河郡浦河町東幌別194番
3	野深	旧姉茶共同墓地	浦河郡浦河町字姉茶582番 2
4	平取	本町共同墓地	沙流郡平取町本町111番地 1 及び111番地 2
5	荷負	荷負ポピボエ共同墓地	沙流郡平取町字荷負（詳細は不詳）
6	上貫気別	旧上貫気別共同墓地	沙流郡平取町字旭（詳細は不詳）
7	近文	近文墓地	旭川市（詳細は不詳）

（注1）No 3 は1979年10月、改葬・移転が行われた旧墓地である。『旧姉茶墓地調査報告』（浦河町教育委員会編・発行、1980年）を参照した。

（注2）No 5 は現用荷負共同墓地との異同について、No 7 は現用近文墓地との異同について不詳である。

（注3）No 6 は『郷土誌貫気別 貫気別自治会百周年記念誌』（貫気別郷土誌編集委員会編、平取町貫気別自治会、2005年、82・414頁）を参照した。

（注4）墓地移転がなされなかったと考えられる地域は、現用墓地を記入した。

ところで、1933年10月20日に発掘したと記載してある沙流郡平取村の1 体については、関連する新聞報道がある。すなわち、1936年7月10日付『時事新報』（北海樺太版）は、「平取部落の土人が学術研究のため土中から尊敬するペンリウクの骨格を掘り返し北人医学部に寄贈し」、生前の平村ペンリウクを知るジョン・バチューラーがアイヌ人骨ではないと異を唱えたが、山崎春雄が計測し、かつ小金井良精が生前に計測した数値と合致したので、平村ペンリウクと確認した旨報じている¹⁶⁾。この記事によれば、平村ペンリウクの埋葬遺体は平取アイヌから寄贈された。

1931年5月30日に北海道帝国大学医学部解剖学第二講座助手に就いた伊藤昌一（1948～1959年：解剖学第一講座教授、1959～1971年：解剖学第二講座教授）も、次のように述べている。

北海道大学解剖学教室においては、その創設当時から山崎春雄教授・岡田正雄〔夫〕助教授らによってアイヌの骨格が蒐集されつつあった。おもに平取村を中心として日高地方において身許の明らかな遺骨の発掘が遺族の承諾のもとに行なわれた。したがって性・年令・氏名の明らかな骨格が昭和の初めころまでに20体余り集められた。平取村の大酋長ペンリウクの遺骨も提供されたことはありがたいことであった¹⁷⁾。

1933年10月平取村での発掘は、発掘場所・作業を写したネガフィルムが「医学部解剖学第一講座旧蔵フィルム」《資料37》に残っている（図1、図2）。

山崎春雄は、1934年8月15日に執り行われた平村ペンリウク頌徳碑（平取町義経神社境内）除幕式に参加して、祝辞を述べている（図3、図4）¹⁸⁾。図4の写真は、山崎春雄と平村ペンリウク遺族との、さらには平取アイヌとの関係を示唆している。



図1 平取村の墓地（1933年10月）



図2 平取村での発掘作業（1933年10月）

また、先述したように発掘人骨台帳の単頁複写物111～113頁には、被葬者の氏名・年齢・没年月日・埋葬年月日・移住歴等、被葬者の遺族しか知り得ないような事実を記してある。山崎春雄は、アイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵に際して、被葬者の遺族、平取アイヌ、墓地管理者から了解を得ていたと考えられる。



図3 平村ペンリウク頌徳碑除幕式
(1934年8月15日)



図4 平村ペンリウク頌徳碑除幕式祝辞
(1934年8月15日)

2. 日本学術振興会における総合研究「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」の策定

2-1. 日本学術振興会補助金（1933年度後期）への北海道帝国大学医学部のアイヌ研究申請

1932年12月28日に創設をみた財団法人日本学術振興会は、学術研究奨励のため、1933年度より研究補助金を交付する「援助補助」事業を開始した。1933年度後期の研究補助金交付申請には313件の申請があり¹⁹⁾、北海道帝国大学医学部からも有馬英二（内科学第一講座）、井上善十郎（衛生学講座）、山崎春雄（解剖学第一講座）・児玉作左衛門（解剖学第二講座）、内村祐之（精神病学講座）の5教授が、「医学・衛生学」分野に連名で申請した。研究テーマは「北海道農民及びアイヌの医学的並に衛生学的共同研究」、申請金額は1万2千円、申請補助期間は3年間である。それぞれの研究テーマは次のようであった。

- (1) 有馬英二「北海道農民及びアイヌ結核の研究」
- (2) 内村祐之「アイヌの精神病的研究」
- (3) 井上善十郎「北海道農民並にアイヌの衛生学的研究」
- (4) 山崎春雄・児玉作左衛門「アイヌ族の解剖学的並に人類学的研究」²⁰⁾

日本学術振興会は、1933年10月11日開催の理事会で、1933年度後期研究補助金交付テーマ163件を決定したが、上記の医学部教授連名による申請は採択されなかった²¹⁾。

2-2. 日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」の策定

1933年10月11日開催の日本学術振興会理事会は、学術部に、下記の「総合研究」に取り組む委員会（1特別委員会、9小委員会）の新設を決定した。

- (1) 第2特別委員会 満洲農業移民問題並ニ満洲及ビ北支ニ於ケル資源ノ研究
- (2) 第1小委員会 無線装置ノ研究
- (3) 第2小委員会 金属材料常数ノ調査研究
- (4) 第3小委員会 流行性脳炎ノ研究

- (5) 第4小委員会 電気溶接ニ関スル綜合調査研究
- (6) 第5小委員会 金属木材等ノ腐蝕防止方法等ニ関スル調査並ニ研究
- (7) 第6小委員会 米穀根本政策ニ関スル理論及ビ實際的研究
- (8) 第7小委員会 トラコーマニ関スル研究
- (9) 第8小委員会 アイヌノ医学的民族生物学的調査研究
- (10) 第9小委員会 明治以降立法資料ノ蒐集²²⁾

「綜合研究」は下記のとおり、日本學術振興会理事会・常置委員会・學術部の「発案」のほか、「諸官庁或ハ民間ノ要望」を反映して策定するものであった。

本綜合研究ヲ行フ問題及ビ之レニ対スル委員会ノ設置ハ、理事会、常置委員会或ハ學術部ノ発案、諸官庁或ハ民間ノ要望ニ基キ、關係常置委員会ニ諮リ、更ニ常置委員長會議ヲ經タル後理事会デ之レヲ決定スル。又委員会ノ經費、委員ノ任命、其ノ他ノ重要事項ハ何レモ關係常置委員会、常置委員長會議及理事会ノ議ヲ經ルコトニナツテ居ル²³⁾

日本學術振興会が「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」を「綜合研究」として設定した経緯は判然としないが、1933年10月19日付『北海タイムス』は日本學術振興会内で課題設定を調節したことを窺がわせる記事を掲載した。見出しは「アイヌ綜合研究／東大、金沢医大も参加／常置特別委員会は北大中心」である。以下は記事の全文である。

日本學術振興会研究補助の本年度後期分に、北大医学部から『アイヌ人の医学的民族生物学的綜合研究』の題目の下に、有馬、山崎、児玉、井上、内村各教授一団となつて研究補助の申請をなした事は既報の通りであるが、この提唱は過般開催の學術振興会常置委員会に於て、果然注目の的となり、たまへ東大よりも永井〔潜〕教授が民族心理学の立場から、金沢医大より古屋芳雄教授が民族生理学の立場から、夫々アイヌに関する研究補助があつたので、常置委員会は右二氏を加へ北大を中心としたアイヌ研究特別委員会の案を草して総会にはかつた処満場の賛同を得、これがため本年は取敢ず二千円、来年からは毎年数千円宛数年にわたり支給して継続的研究を為さしめる事となつた。右は内科解剖衛生精神、生理等の各専門の立場から、アイヌ民族に対し医学的綜合研究をなし、その保護上に資せんとするもので、特別委員会は近く札幌に於て第一回の委員会を開き、研究の分担をきめるまでに具体化して²⁴⁾

記事によれば、アイヌに関する研究補助申請が、北海道帝国大学医学部のほかに、東京帝国大学医学部の永井潜^{ひそむ}（東京帝国大学医学部教授、専門：生理学、日本民族衛生学会理事長）、金沢医科大学の古屋芳雄^{こや}（金沢医科大学教授、専門：民族生物学、日本民族衛生学会常務理事）からあつたため、日本學術振興会學術部第八常置委員会はこれら3大学の申請をとりまとめて「綜合研究」としたという²⁵⁾。

記事では、永井潜、古屋芳雄2名の申請テーマは明らかではない。北海道帝国大学医学部の申請テーマは「アイヌ人の医学的民族生物学的綜合研究」とあり、「北海道農民」が削除され、「衛生学」が「民族生物学」に置き換わっている等、当初の申請テーマ「北海道農民及びアイヌの医学的並に衛生学的共同研究」とは異なっている。

しかし、「綜合研究」を「學術部ニ官民ノ学者、専門家及ビ代表者デアル各方面ノ權威者ヲ網羅シタ特別及ビ小委員会ヲ設置シテ、綜合研究ニヨリ重要問題ノ解決ニ力ヲ用ヒテ居ル」²⁶⁾と位置づけていた日本學術振興会が、「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」を「重要問題」と捉え、主導したことは明らかである²⁷⁾。

2-3. 日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」の調査研究分野と分担

第8小（アイヌ）委員会は1933年11月に発足した。「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」（以下、「アイヌ総合研究」と略記する場合がある）の目的、第8小委員会の構成は以下のようであった。

（1）調査研究の目的

「人種ノ孤島」ト呼バレ、世界ノ人種学上独特ノ存在ヲ保ツテ居ル「あいの」民族ハ、現在セルモノ僅々15,000ニ過ギナイ許リカ、依然トシテ遞減ヲ示シツツアリ、且ツ其ノ多数ハ混血ニ属シ、純粹ナル者ニ至ツテハ尠ナシ。以上ノ状況故、今ニシテ之レガ調査ヲ行ハナカツタナラバ、永遠ニ此ノ大切ナル資料ヲ失フノ虞ガアル。茲ニ於テカ医学民族生物学ノ見地ヨリ、該民族ノ綜合的調査研究ヲ行ヒ、其ノ本質ヲ明ニシ、広ク之レヲ世界ノ学者ニ伝フルト共ニ、該民族ノ保護ニ資スル所アラントスルモノデアル²⁸⁾。

「人種ノ孤島」あるいは「人種学上独特ノ存在」とは、アイヌ民族をいかなる人種の系譜にも位置づけることができずにいるという、人類学上の課題を指している。「純粹ナル者」を云々するのは、「人種ノ孤島」を解決するために「純粹なアイヌ」を対象とした調査を行う好機と捉えていたからである。アイヌ民族は医学と民族生物学の格好の対象であった。別の箇所では「絶滅セントスル民族ニ対シ医学的綜合研究」を行うと説明しており²⁹⁾、「絶滅」前に「大切ナル資料」を収集しておこうという意図は明白である。「該民族ノ保護ニ資スル所アラン」とは、「研究の社会的意義」を唱えたものである。

（2）第8小（アイヌ）委員会の構成（氏名、所属機関と職名、専門分野）

永井 潜	東京帝国大学医学部教授（生理学）
有馬英二	北海道帝国大学医学部教授（内科学）
井上善十郎	北海道帝国大学医学部教授（衛生学）
内村祐之	北海道帝国大学医学部教授（精神病学）
児玉作左衛門	北海道帝国大学医学部教授（解剖学）
古屋芳雄	金沢医科大学医学部教授（民族生物学）
林 春雄	東京帝国大学医学部教授（薬理学）
山崎春雄	北海道帝国大学医学部教授（解剖学）

委員長は永井潜である。先述したとおり、永井潜は日本民族衛生学会理事長である。林春雄は日本学術振興会学術部第八常置委員会委員長であった。1934年2月には今裕（北海道帝国大学医学部教授、専門：病理学）と高橋信吉（北海道帝国大学医学部助教授、1935年から長崎医科大学教授、専門：皮膚科学）、同年5月には越智貞見（北海道帝国大学医学部教授、専門：眼科学）が委員に追加された³⁰⁾。「アイヌ総合研究」を担うことになったのは、当初は8人、1935年からは11人の医学者たちである³¹⁾。

1933年12月15日、永井潜と林春雄は、第8小（アイヌ）委員会開催のために来札し、「道庁方面の理解と援助に俟つもの尠くない」と、北海道庁長官佐上信一に面会した。「援助」の内容は不詳であるが、道庁長官からは「了解を得る処あつた」という。そのうえで、午前10時から第1回委員会を北海道帝国大学医学部附属医院院長室で開催した。参加者は永井潜、有馬英二、井上善十郎、内村祐之、児玉作左衛門、古屋芳雄、林春雄、今裕であった³²⁾。第1回委員会では、1934年度から「研究に着手するため委員の分担や調査研究方法及び之に要する費用を学術審興会に提出する予算等の主として準備事項の協議をなした」という³³⁾。

第1回委員会は、生理学・内科学・衛生学・精神病学・解剖学・民族生物学・病理学の7調査研究

分野とそれらの担当者、内科・眼科・皮膚病黴毒科の診療班、研究費（予算）の編成を以下のように決定した。

（１） 調査研究分野（担当者）

- ①一般及ビ生理学部：特ニ運動系感覚系ノ機能ニ関シ心理的方面モ考慮シテ研究（永井潜）
- ②内科学部：内科学的臨床生理学的調査特ニ結核血液像、呼吸生理基礎代謝等ノ検索（有馬英二）
- ③衛生学部：一般衛生学ノ見地ヨリアイヌノ生活状態ノ検討並ビニ戸口調査（井上善十郎）
- ④精神病学部：アイヌノ精神生活及ビ体型ト精神病トノ関係、イム、神経黴毒、アイヌ児童ト智能等ノ研究調査（内村祐之）
- ⑤解剖学部：土人骨格ノ蒐集ト計測、其ノ他一般解剖学的調査（山崎春雄、児玉作左衛門）
- ⑥民族生物学部：アイヌノ生体ニツキ人類学的計測ヲナシ以テアイヌノ人種的地位決定（古屋芳雄）
- ⑦病理学部：アイヌノ病理学的調査殊ニ寄生虫病学的調査（今裕）
- ⑧全般：（林春雄）

（２） 診療班（担当者）

内科、眼科及ビ皮膚病黴毒科ノ３科ヲ以テ組織シテ医療ノ恵沢ニ浴セシムルト共ニ、調査資料ノ蒐集ニ便アラシメル。之ハ結核、黴毒、眼疾ハアイヌノ３大民族病ト思惟セラルルガ為デアル。

（内科：有馬英二、眼科：越智貞見、皮膚科：高橋信吉）³⁴⁾

（３） 研究費（予算）

総額58,930円（1933年度2,000円、1934年度18,000円、1935年度16,200円、1936年度12,880円、1937年度9,850円）³⁵⁾

第8小（アイヌ）委員会委員11人のうち、8人が北海道帝国大学医学部教官であった。「学術振興会に於ける「アイヌに関する研究」の小委員会が本学に生まれた」（1933年12月12日付『北海道帝国大学新聞』記事）とは誇張を含むが、委員数では他を圧していた。さらに、有馬英二はアイヌ研究の「業績」を有しており、山崎春雄はアイヌ人骨を発掘・収蔵していたのは先述したとおりである。

一方、北海道帝国大学以外の委員では、林春雄は第八常置委員会委員長として「総合研究」を束ねる「立場」を象徴しているだけであり、「アイヌ総合研究」以前にアイヌ研究に携わった形跡はない。日本民族衛生学会常任理事でもあった古屋芳雄は、「アイヌの研究に留意し……生物測定学的研究を行ふ準備として」、1932年夏に北海道勇払郡鷗川村（現むかわ町）付近で「戸口調査と視察」を行い³⁶⁾、1933年9月に「日本及「アイヌ」民族に於ける両性出生比率の研究＝出生比率に及ぼす社会及生物学的影響の調査＝」を著していた³⁷⁾。日本民族衛生学会は、機関誌『民族衛生』第3巻第2号（1933年12月）で、古屋芳雄による1932年戸口調査の「継続事業」として、第8小（アイヌ）委員会「アイヌ総合研究」が、「アイヌ民族の体質、衰亡の原因、混血問題等の重要事項を調査研究」することになったとの記事を掲載し、日本民族衛生学会が「総合研究」策定に果たした役割を誇張した³⁸⁾。しかし、日本民族衛生学会理事長の永井潜が、アイヌ研究に携わった形跡は見当たらない。

内科・眼科・皮膚病黴毒科からなる「診療班」を設置したのは、「医療ノ恵沢ニ浴セシムルト共ニ、調査資料ノ蒐集ニ便アラシメル」とあり、診療はアイヌ民族の調査を円滑に推進するための手段であった。

第1回委員会終了後、林春雄は「委員を代表してアイヌ総合研究につき」以下のように語ったという。

アイヌは、民族上非常な特性を有し、わが大和民族としては此のアイヌの血がどれだけ入つて

居り、またその結果がいかなるものであるかを知る事は、極めて重要な事と思ひます。

一方、アイヌ自身としては、結核その他の悪性の病氣を持つて居り、衛生状態も悪く衰滅^{ママ}の道程を辿つてゐる事は気の毒な次第で、吾々が同胞として病氣の治療予防や生活状態の改善をはかつてやり、民族としての保存保護を与へてやる事は当然の義務で、またそれによりアイヌが民族として、今後またどんな優良なものになるかも知れないといふ期待を持つものであります³⁹⁾。

林春雄は、日本学術振興会第八常置委員会委員長として、調査研究の目的に謳つた「今ニシテ之レガ調査ヲ行ハナカツタナラバ、永遠ニ此ノ大切ナル資料ヲ失フノ虞ガアル」という「学術的企図」には触れずに、もっぱら「混血」の問題に置き換えた。また、「同胞」として病氣治療・予防、生活状態改善をはかり、「民族としての保存保護を与」えると「憐憫の情」を垂れたのである。

日本学術振興会は、特別委員会・小委員会における研究活動を、以下のように位置づけていた。

斯クシテ設置サレタ委員会ハ其ノ研究方針、研究事項ヲ決定シ、必要ナ事項ニハ分科会ヲ設ケ、更ニ経費及ビ研究担当者ヲ定メ、各分担者ニ於テハ有効適切ナ研究調査ヲ行ヒ、時々会議ヲ開キ既往ノ研究ヲ討議シ、更ニ将来ニ於ケル之レガ実施ニ関シ慎重審議ヲ重ネ、研究者ニ於テハ其ノ研究結果ヲ委員会ノ承認ヲ経テ発表シ、委員会ニ於テハ此ノ発表論文ヲ配布シ、更ニ委員会ノ中間及ビ終了報告ヲ提出シ、研究ノ進行ヲ明カニスル等各委員ノ協同ニヨリ綜合研究ノ実ヲ挙ゲテ居ル⁴⁰⁾。

日本学術振興会は、特別委員会・小委員会には、研究方針、研究事項、委員会下部組織としての分科会、経費、研究担当者を決定させ、研究者には「有効適切ナ」研究調査を行い、研究結果の発表を求めた。また、中間・終了報告の提出と、委員が協同して「綜合研究ノ実」を挙げることを求めた。日本学術振興会は「重要問題」を設定して研究補助金を決定はしたが、研究と協同は、委員会及び委員である研究者にゆだねていたのである。

しかし、実際には、第8（アイヌ）小委員会が「時々会議ヲ開キ既往ノ研究ヲ討議」した形跡は見出せない。研究結果は、委員各自が学術雑誌に発表してはいたが、「委員会ノ承認」を経たという証拠はない。「委員会ノ中間及ビ終了報告」と呼べる文章は、少なくとも『特別及小委員会ニヨル綜合研究ノ概要』（日本学術振興会編・発行）には見当たらない。第8（アイヌ）小委員会について、「綜合研究ノ実」を見出すのはさらに困難である。

第8（アイヌ）小委員会「アイヌノ医学的民族衛生学的調査研究」は、アイヌ研究の担い手たる医学者の自己意識のもと、北海道帝国大学医学部・東京帝国大学医学部・金沢医科大学教授個々のイニシアティブに委ねられたまま進行し、教授たちの関心のおもむくままに推移した。日本学術振興会がそれを咎め立てたことはなかった。

3. 日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会「アイヌノ医学的民族生物学的調査研究」解剖学部アイヌ研究

3-1. 解剖学部（山崎春雄）の「研究成果」

（1）アイヌ生体計測研究

第8（アイヌ）小委員会「アイヌノ医学的民族衛生学的調査研究」の調査研究分野「解剖学部」を担当した山崎春雄（北海道帝国大学医学部解剖学第一講座教授）は、解剖学部のテーマ「土人骨格ノ蒐集ト計測、其ノ他一般解剖学的調査」を、どのように具体化しようとしたのか、一切記していない。記さないまま、写真にもとづく生体計測を行うために、アイヌ半身像の写真撮影をもっぱらにした。

山崎春雄の「研究成果」は以下のとおりである⁴¹⁾。

表11 山崎春雄のアイヌ研究発表一覧

No	発表名等
①	「旭川市近文「アイヌ」部落ニ於ケル「アイヌ」人ノ生体測定」、『日本聯合衛生学会々誌』第8巻、1936年7月
②	「アイヌ人写真生体測定に関する報告」（日本民族衛生協会第5回学術大会報告抄録）、『民族衛生』第5巻第5号附録、1936年12月
③	「「アイヌ」人容貌ノ人類学的観察」（第45回日本解剖学会総会講演抄録）、『解剖学雑誌』第10巻第3号、1937年6月
④	「「アイヌ」人容貌の人類学的観察」（講演抄録）、『書報農學會連合大会第二回紀事』1937年10月

①「旭川市近文「アイヌ」部落ニ於ケル「アイヌ」人ノ生体測定」は、第8回日本聯合衛生学会（北海道帝国大学医学部南講堂、1936年7月7～9日）の冒頭で、日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会の委員全員が発表した「日本学術振興会第八小委員会研究発表」についての講演要旨である。その概要は以下のとおりである。

調査期間：1936年2月3日～2月11日

調査地：旭川市近文

調査人数：184例

男82例（成年60例・児童22例）、女102例（成年77例・児童25例）

調査事項：人類学的計測、頭部の「精密ナル」生体測定、頭部の「正確ナル」三方面からの写真撮影

184人は近文アイヌ292人（男137人、女155人）中63%に相当する。もっとも、「計測事項ハ目下整理中」とあった⁴²⁾。その整理結果を発表した形跡はない。

②「アイヌ人写真生体測定に関する報告」は、「日本民族衛生協会第五回学術大会抄録」（『民族衛生』第5巻第5号附録）に日本学術振興会学術部第八常置委員会第8小（アイヌ）委員会の委員全員が名を連ねた「アイヌの医学的民族生物学的調査報告（日本聯合衛生学会と共同主催）」の一端である。『民族衛生』には各委員のタイトルを並べてあるが、内容の記載はない。

④「「アイヌ」人容貌の人類学的観察」は、東京人類学会日本民族学会第2回連合大会（1937年3月29～31日）で、「特殊課題 最近のアイヌ民族問題」のもとに行った講演の要旨である。山崎春雄は、アイヌの「正しき写真」を印画上で計測するなら、生体計測と差異はなく、生体では計測し得ない部分を計測でき、急激に体質変化を来しつつある彼等の写真は「将来の研究資料に備ふること」になると述べている。撮影は、ライカカメラ・20cm長焦点レンズを使用し、4mの距離で行った⁴³⁾。

③「「アイヌ」人容貌ノ人類学的観察」は、④と同一の文章である。

（2）『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要』にみる山崎春雄の「研究成果」

山崎春雄は、日本学術振興会『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第2回』に、以下のような「研究調査ノ大要」を載せた。

委員山崎春雄ハアイヌ男女ニツキ精密ナル人類学的写真ノ撮影ヲ行ヒ、コレヲ以テ骨格ト同様永久ニ保存スベキ研究資料トナスコトニ努メタ。斯クシテ撮影シタルアイヌ総数ハ、近ク1,000名ニ達セントシテ居ル⁴⁴⁾。

日本学術振興会『特別及ビ小委員会ニヨル綜合研究ノ概要 第3回』には、以下のような「研究調